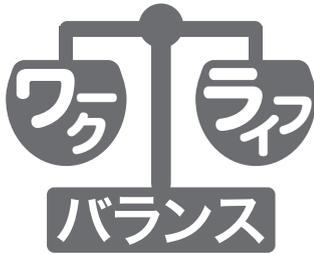


私の



「仕事×家族のケア」の20年をふりかえって

茨城キリスト教大学文学部児童教育学科 教授

江尻桂子 (えじり けいこ)

Profile —

お茶の水女子大学人間文化研究科博士後期課程修了。博士（人文科学）。2012年より現職。専門は発達心理学（乳幼児の認知・言語の発達）。著書に『乳児における音声発達の基礎過程』（単著、風間書房）など。

「仕事も生活もあきらめない」研究者を応援する連載の第7回は、研究漬けで学位を取得後、新天地に飛び込む勇断をし、地縁や血縁に代わる様々な縁を自ら作りつつ、3人のお子さんのケアと仕事を両立されてきた、江尻桂子先生です。

院生の頃は、朝から晩まで研究に明け暮れ、それなりに楽しく充実した毎日でした。そうしたなか、ある時ふと、「自分はそのまま研究というワークに没頭しすぎて、もうひとつのワーク（出産・育児）のことを忘れてしまうのではないか」と思いました。そこで、学位取得後は、夫（院在学中に入籍）のいる茨城県東海村に移り、地元の短大に職を得て、子どもを産み育てるというワークにとりかかりました。

29歳から35歳までに3人の娘を授かったのですが、三女に重度の障害がありました。障害について知らされたときの衝撃は、今でも忘れられません。日中、娘と二人でいるとネガティブな考えばかりが浮かぶようになり、周囲の人に助けを求めました。友人や知人、村の育児サポーターさんやシルバー人材センターの方が交代で家に来てくれ、娘にミルクをあげたり、私自身の話し相手になってくれたりしました。

このことを機に、我が家は多くの支援者が入り出す場となりました。3人の娘たちは、保育園や学童保育にもお世話になりましたが、そこでカバーしきれない部分

は、こうした地域の方たちの支援に頼りました。地縁も血縁もない土地での育児でしたが、さまざまな年代、さまざまな価値観をもつ人たちと共同で子育てができたのは、親子双方にとって、良かったように思います。

三女は現在、特別支援学校の中等部に通い、さまざまな支援サービス（放課後等デイ、日中一時支援、短期入所など）を利用して生活しています。重度の知的障害があるため、日々、困りごとは尽きず、「なぜこのような試練があるのだろう」と考えることもあります。ただ、人生を「有意義で楽しい」ものと期待するなら、不可解なこの状況も、「人生＝修行」と考えれば、納得できるような気もしてきます。ともあれ、娘が今日も呑気な顔をして元気に過ごしている限りは、多少のことがあっても、「ま、いっか」と思うようにしています。

最近では、娘の身長が私を超え、力もついてきたので、世話をするこちらにもそれなりの体力が必要です。そこで、年に一度はマラソン大会に参加することとし、学生たちにもエントリーを呼びかけます。写真は、勝田全国マラソン10キロメートルの部に参加したときに、ゴールで撮影してもらったものです。

さて、大学教員として、また、研究者としてのワークについても触れておきます。2020年度は、大学では全学教養課程センター長（教養科目に関する学務の統括）を、

学会では「発達心理学研究」の編集委員長を務めました。いずれも責任の重い仕事でしたが、家でのワークに比べれば、それほど大変ではありませんでした。

とはいえ、編集委員長としてのこの一年は、日々、迅速な判断と細やかな対応が求められ、かなり気の張る毎日でした。無事に任期を終えることができ、ほっとしています。一方で、全国から選ばれた委員の先生たちとの編集作業は、毎日が学びの連続で、ほんとうに貴重な経験となりました。

そのようなわけで、私にとっての2020年は、家族のケアに翻弄されながらも、仕事を諦めなくて良かった、細々とでも研究を続けてきて良かった、そう実感できた年でした。ただ、こんなふうに見えるようになるまでに、第一子を出産してから20年かかりました。いま、仕事と家庭の両立で悩んでいる方がいらしたら、5年、10年、という長いスパンで考えてみるのも一つかもしれません。いまは、どちらのワークも中途半端にしかできないかもしれませんが、一つひとつの小さなワークを丁寧に積み重ねていくことで、いつか、自分がこうありたいと思う姿に近づけるのではないかと思います。皆さんそれぞれに大変な日々かと思いますが、無理をせず、周りの人を頼りながら、一緒にがんばりましょう！

